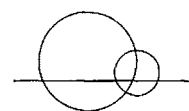


〈ブックレット紹介④〉



## 『満州の青少年像』



東亜同文書院大学記念センター  
ポストドクター 武井義和

ロナルド・スレスキー『愛知大学東亜同文書院  
ブックレット④ 満州の青少年像』  
(愛知大学東亜同文書院大学記念セン  
ター編 (株)あるむ発行、2008年)

2006年11月20日から22日までの期間、愛知大学東亜同文書院大学記念センターは、パシフィコ横浜で開催された図書館総合展で資料展示会を開催しましたが、会期中の21日には「海を渡った若者たち」というテーマで、記念センター主催の講演会も行いました。ロナルド・スレスキー氏も「満州の青少年像」という題で講演されましたが、その直後の11月25日(土)に愛知大学豊橋校舎に来学され、同じ内容で講演されました。このブックレットは、その時の「満蒙開拓団青少年義勇軍」についての講演内容が活字化されたものです。

1938年に当時の拓務省によって、農村から少年を募集して3年間満州で訓練させることを目的として創設された「満蒙開拓団青少年義勇軍」について、この団体が創設され、形作られた思想的背景や軍事的意図に始まり、10代の青少年、現在でいえば中学生から高校生くらいの世代の若者が義勇軍の募集に応じ、日本国内で訓練を受けた後に満州へ渡っていった様子、「訓練所」と称される現地の施設での生活状況などが詳細に述べられています。

しかし一方で、3年間親元へ帰れないという生

活は彼らにとって厳しいものでした。中には自閉症となり内にこもってしまう者や、逆に攻撃的となり暴力事件が引き起こされたこともありました。さらに、旧日本軍内部で行われた制裁と同様に、義勇軍内部でも先輩による後輩へのイジメがあり、「昌図事件」のように両者が武力衝突し死傷者が出た事件も発生しました。

ブックレットではこのような事例について触れられるとともに、例えば「昌図事件」のような流血の惨事が引き起こされた背景として、少年たちが満州について大人たちから聞かされ、想像していたことと現実が大きく違っていたこと、大人の社会に対する反抗があったことなどが明らかにされており、義勇軍の少年たちの心理についても触れられています。

記念センターが主催する講演会の多くは、東亜同文書院に関わる内容ですので、スレスキー氏のような研究はきわめて異色のものです。しかし、写真や地図も多く掲載されていますので、知識がない方でも読みやすくなっています。満蒙開拓団の悲劇はよく語られるところですが、青少年が義勇軍に入隊した経緯、満州における義勇軍としての生活の様子、そしてその生活において彼らの心理がどのようなものであったかという点は、戦前日本の国家や教育のあり方を考えるとともに、旧満州と日本人との関わり方などを考える上でも、大変参考となるでしょう。